

自動車大手による国内拠点のマザー工場化の動き ～国内生産は需要に合わせて中長期的に減少か～

- 従来から製造業では、国内拠点のマザー工場化を進める姿勢が鮮明となっている。マザー工場化とは、先端技術を日本で構築、進化させた後で世界へ展開するといった発想のもと、日本の工場を従来の輸出拠点とは異なる、新たな役割にシフトさせていく動きである。
- このほどホンダが7月の社長会見において、国内工場の役割について言及している。それによると、国内工場は「先進生産技術の追求」「海外支援機能の強化」を含む3つの役割に集中することがうたわれている。『マザー工場』という表現はないものの、十分にそれを示唆する内容といえよう。
- そして国内工場の3つめの役割は、「国内向け商品の効率的な生産」である。印象としては、非常に抑えられた表現であり、国内需要は国内工場でまかなうという位置づけでもない。同業他社が主要車種の逆輸入をはじめたように、同社もいずれ同じような戦略を取る可能性もあろう。全体として国内需要は今後減少する可能性が高いため、国内生産も減少すると考えるのが妥当とみられる。
- それと対照的なのが、グローバル生産に対する考え方である。需要のあるところで生産するという「地産地消」の発想を鮮明にしており、今後はアジアを中心に生産を拡大するものとみられる。しかも、「現地の金型で、現地の材料や部品を使って、現地で生産する」という戦略のため、日本の関連産業への恩恵は限定的なものとなろう。
- 今後、こういったマザー工場化の動きが業種を問わず広がるなか、変化を迫られるのは、従来の下請け構造を支えてきた企業や、大企業との取引に頼ってきた企業であろう。マザー工場化は一過性の動きではないだけに、いち早い対応が必要とみられる。

マザー工場化を示唆する自動車大手

国内工場

3つの役割に集中していきます。

- ① 環境商品や小型車に関する先進生産技術の追求
- ② 国内向け商品の効率的な生産
- ③ 海外支援機能の強化

グローバル生産

「需要のあるところで生産する」という基本的な考えのもと、**新興国を中心に現地化を進めます。**

(出所) 本田技研工業(株)HP「2010年7月社長会見骨子」
太字、アンダーラインは弊社による

2007年を100とした各国経済の回復予想
(IMF「World Economic Outlook」)

